

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年10月） 回覧

14. 郷土の偉人 梨祖 川上善六翁

東国の梨栽培は18世紀後半に市川八幡の川上善六が確立した栽培技術から始まる。これを称えて、葛飾八幡宮境内に「梨祖川上善六翁」の顕彰碑(大正4年)が存在する。

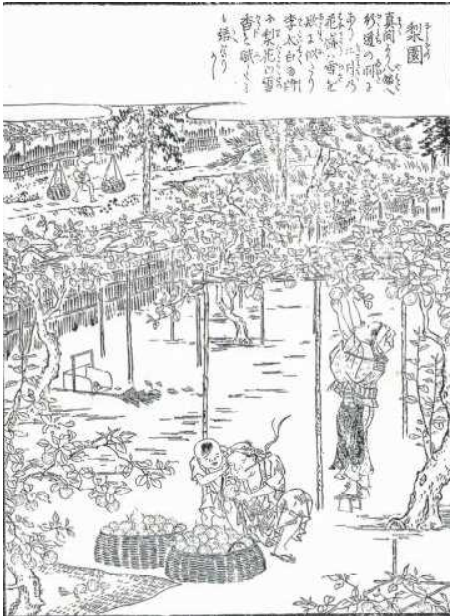
川上翁の事績を『郷土読本 市川の歴史を尋ねて』(市川市教育委員会)、『市川物語』(綿貫喜郎著)から紹介したい。物語的内容もあるが、それも歴史である。

川上善六は寛保2年(1742)に八幡の大芝原(現在の八幡2、3丁目)に生まれる。学問を好み、まじめに働くが、市川砂州上の土地の為、穀物栽培には余り適さず、祖父の代から抱えた借財を返すのもままならない状況であった。砂地に適し、需要のある産物を探していたが、明和7年(1770)の葛飾八幡宮の祭礼(ボロ市)に出店していた古本屋から詩集を入手し、そこで李白(唐の詩人)の詩「梨花 白雪にして香し」(楊貴妃もいた唐の宮廷の庭の美しさを詠んだ詩の一節)に啓発されて梨栽培に没頭したと伝わる。

それから「梨きちがい」と村人から蔑まれるほど梨栽培に打ち込む。寛政年間(1789~1801)に尾張・美濃地方で梨栽培が盛んと聞いて出向くと八幡と同じ砂地である。そこで尾張藩の許しを得て強壯な接穂を得る(後に尾張藩主には毎年、梨を献上)。枯らさずに持ち帰るために、接穂をダイコンに挿して、道中で新しいダイコンを求めては挿し替えて、やっと八幡に持ち帰ったとの言い伝えが残っている。

葛飾八幡宮(法漸寺)境内で梅に接ぎ木をして育てると、数年後には立派な果実をつけるようになる。その後川上善六は法漸寺の境内200坪を借りて、梨園を開くに至る。

川上善六が偉いのは梨栽培技術を自分一人のものにせず村人に教えたことである。



その結果、八幡を中心に周辺農家にも梨栽培は広がり、文化8年(1811)年刊の紀行文『十方庵遊歴雑記』には、市川の渡しから船橋まで三里余の沿道全て「淡雪」と称する品種の梨が植わり、栽培農家が高収益をあげていたことが記載されている。後世「八幡、菅野は歯磨いらぬ 梨の芯棒で歯を磨く」と歌われた伝わる(梨にはキシリトールの仲間のソルビトールが含まれ虫歯予防効果があり、リグニン、ペントザンの細胞膜が分厚く形成された石細胞が多く、歯垢除去効果がある)。

(左図は『江戸名所図会』の挿絵。上部に「梨園真間より八幡へ行道の間にあり。二月の花盛りは雪を欺くに似たり。李太白の詩に「梨花白雪香」と賦したるも諾なりかし」と書き込まれている。)

善六は祖父以来の借財を返済し、多大の財産もつくるが、奢り、高ぶらず真面目で質素な生活をして世を送る。農耕の暇を見ては読書に耽り、漢学を学び、孟慶と号して熱心に村人に読み書きを教える。享和元年(1801)60歳時に当時の代官が孝養と勤勉を称えて金千疋(約1.7両)を与えて賞する。また幕府から村の篤志家として名字帯刀も許され、文政12(1829)年に87歳で逝去という見事な人生を送る。八幡の偉人である。